

大阪市立大学 正会員 ○ 角野昇八
大阪市立大学 後藤広行

1. まえがき 昨年の河川法改正では、従来盛り込まれていなかった「環境」が目的の一つとして明記された。これによって、従来からの治水・利水ばかりでなく、環境も視野に入れた河川行政が地域と連携しつつ総合的になされ出そうとしている。このような情勢を受けて、一昨年度、大阪のいくつかの河川の周辺住民にアンケート調査を行い、その結果の一部を昨年の本講演会で報告した。¹⁾

本稿では、引き続き昨年に実施した大阪の別の河川の周辺住民を対象とした同様のアンケート調査結果を報告する。なお、本稿では数々のアンケート調査項目のうち、環境や水質、景観、総合評価に関する結果について重点的に報告する。

2. アンケート調査河川 調査対象河川は大阪市の東部を流れ、

過去に幾度か洪水氾濫被害を被ってきた平野川および平野川分水路（調査地域は生野区と東成区）、現在は排水路のようになっている駒川および緑化整備がよくなされている今川（同、東住吉区）、緑化整備がよくなされている今川（同、東住吉区）、緑化整備がよくなされている住吉川（同、住之江区）の計5河川である。このうち、前2河川は市東部を北に平行して流れる兄弟河川である。また後4河川は平野下水処理場からの3次処理水を流している。

表1 回答者の内訳（人）

	回収数	うち男	うち女
平野川	101	52	49
平野川分水路	102	66	36
今川	173	105	68
駒川	86	45	41
住吉川	72	40	32

3. 調査方法と回答者の内訳 アンケート調査用紙の配布と回収は、当該地区の自治会長や町会長に依頼するか戸別に訪問する形で行った。各河川ごとの回答者の内訳を表1に示す。回答者の年齢は全河川で60歳以上が最多であり（42%－52%）、あと低年齢層に漸減していく構成となっている。男女比率では全河川で男性が若干多い（52%－65%）、居住住宅種類は住吉川地区を除いて持ち家が80%程度であり、住吉川地区では55%程度（借家が28%、公団住宅が11%）でともに最多であった。またこれにともない、居住階は全河川地区で55%－65%が2階以下に居住していた。なお、住吉川地区では33%が3階から7階までの階に居住している。居住年数は、今川地区を除いて30年以上がもっとも多く（42%－64%）、ついで10年から29年、9年以下は最小であった。今川地区では10年から29年が最多で、ついで30年以上、9年以下の順であった。なお、川を見る回数は、全河川で2、3日に1回が最多であった（47%－71%）。

4. 調査結果

1) 過去10年間の水質変化に関する回答結果

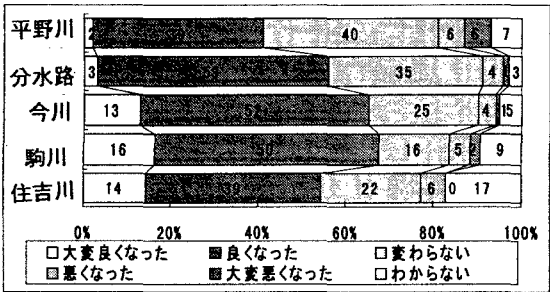


図-1 過去10年間の水質変化に対する評価

図-1は、最近10年間で川の水はきれいになったか？という問いに対する回答である。3次処理水が流されている今川、駒川、住吉川の3河川で大変良くなったという回答が15%内外ある一方で、それが流されていない平野川で「大変悪くなった」が6%あるのが目をひく。この、平野川分水路に比べて低い平野川での評価は、両河川におけるBOD値の大幅な相違²⁾に符合する内容となっている。

2) 過去 10 年間の環境変化に対する回答結果

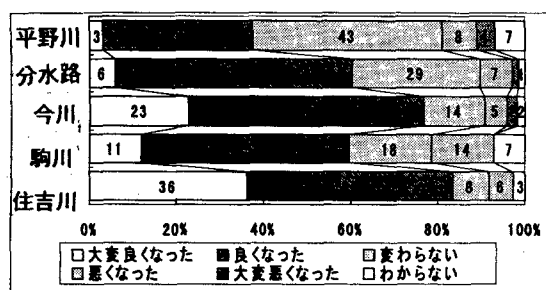


図-2 過去 10 年間の環境変化に対する評価

ほぼ同じとなっている。また、同じく住吉川の 83 %は、同じ環境の城北川に対する 84 %¹⁾とほぼ同じである。

3) 過去 10 年間の景観変化に対する回答結果

景観に対しても同様の調査を行った。ここには示さないが、「大変良くなった」と「良くなった」の総数は、ほぼ全川で環境に対する評価とよく似た傾向にあり、人々は環境と景観とをかなりの程度だぶらせて見ている傾向がうかがわれる。ただし、環境評価に比べて「大変良くなった」が全河川で低くなっているなかで、平野川および同分水路、駒川では全く見られず、景観に対する厳しい評価が現れている。

4) 総合評価と分析

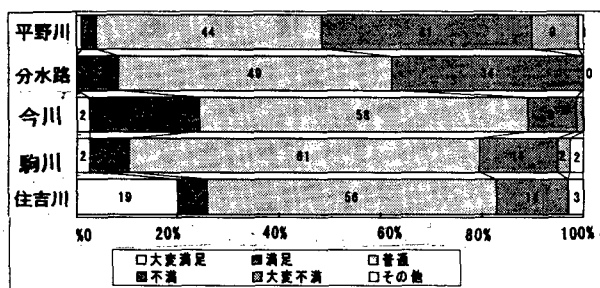


図-3 総合評価

環境、景観、総合評価の意識にまで影響を及ぼしているように見える。すなわち、水質は、河川の評価にあって最も基本的かつ最重要な項目といえよう。また、駒川の例に見られるように、水質の条件がクリアされても、環境あるいは景観が整備されていなければ河川に対する評価は低いものとなる。一方、住吉川はトータルに高い評価を受けているが、これは城北川と同様に、緑に囲まれた遊歩道の整備を理由として挙げることができ、今後の河川行政の一つの方向を示しているものと考えられる。

アンケートではさらに、周辺河川に対するイメージも選んでもらった。結果をまとめれば、平野川および同分水路は「どぶ川」、駒川は「排水路」、住吉川は「魚はいないが憩いの場」、今川は「排水路だが緑豊かな憩いの場」となった。アンケート結果は、まさしくこれらの言葉に代表される内容となっていて興味深い。ただし、平野川分水路は「どぶ川」ではあるが、アンケート結果は最近の水質や環境、景観の改善が一定程度評価されていることを示している。

参考文献

- 1) 角野・大谷：大阪の河川に対する周辺住民の意識に関する一調査、関支講、1997。
- 2) 大阪市環境白書（平成 7 年版）、大阪市、1995。

図-2 は、環境変化に対する同様の設問の結果を示したものであるが、平野川および平野川放水路周辺での評価が低く、中でも平野川で低い。これに対して、残り 3 河川では比較的评价が高い。ただし、緑地整備が十分になされていない駒川での評価の低さを指摘することができる。なお、同じ状況にある今川と駒川の内、今川での「大変良くなった」と「良くなった」をあわせた 76 %は、同じ河川環境をもつ細江川に対する 78 %¹⁾と

各調査地区において、総合評価を尋ねた結果を図-3に示す。「大変満足」から「普通」までの評価の総数は環境評価や景観評価での「良くなった」までの総数の傾向とよく似た傾向を示している。

5. まとめ 以上の回答結果の平野川と同分水路の結果の比較から見られるように、似た河川条件にあっても、当然ながら水質の良否によって評価が変わり、その評価は人々の環